

明治時代の文学作品における外国語・外来語の使用

アンカ・フォクシェネアヌ

ブカレスト大学

1. はじめに

本稿の目的は明治時代の代表的な文学作品における外国語・外来語の使用とそれらに対しての当時の日本人の態度を分析し、明治時代に行われた西洋の概念、知識の摂取に関して述べることである。

最初に明治政府が実施した言語政策、特に欧米言語からの単語の輸入を中心に、簡単に紹介する。次に明治時代における文学作品を基に、この政策が実際にどの程度実施されたのか、即ちどのような外国語・外来語が実際に使用され、理解されたか、また当時の日本人はこの新しい言葉に関してどう思ったかを分析する。

分析の資料として福沢諭吉の『福翁自伝』、夏目漱石の『坊ちゃん』と『文鳥・夢十夜』、森鷗外の『雁』を使用する。最後に森鷗外のエッセー『翻訳に就いて』にも触れる。

本稿では外国語と外来語という用語は次のように使い分ける。外国語はローマ字で、原語のつづりの通り表記されている語、句、文をいう。外来語はカタカナで表記され、日本的な発音で日本語として定着したものをいう。また外国語と外来語の間の中間的なものもあると判断し、それらは外国語の発音としてカタカナで表記される語をいう。

2. 明治時代における言語政策

明治維新の主な目的はヨーロッパの近代社会制度を取り入れることであり、その中で当時の日本政府は日本語そのものを近代化する必要があると感じ、特定の国語政策を計画した。それは「言語改革論」などの名前で知られている。

この明治時代の言語政策は、Igarashi (2007)を参考にし、以下の4点にまとめることができる。

1. ヨーロッパ言語からの多くの外来語の輸入
2. 義務教育における漢字数の減少
3. 言文一致 (書き言葉と話し言葉の一致)
4. 仮名遣い (仮名の使い方の統一)

上述の言語政策実施の結果として1902年に「標準語」が制定され、1903年に口語の教育が(小学校における国語教科書に)導入された。また、新漢語とヨーロッパ言語からの言葉を取り入れたことにより日本語の語彙は急増した。

2.1 ヨーロッパ言語からの外来語の輸入

本稿のテーマと特に関係あるのが1.の欧州の言語からの外来語の取入れである。以下外

来語輸入の過程はどのように行われたかを簡単に述べる。

明治時代の日本人は主に二つの方法で外国語と接触した。一つは来日した外国人（特に教師、商人など）と直接接触し外国語を聞く・話す方法であった。もう一つは書物を通して外国語また外国のことを勉強し間接的に外国語を知る方法であった。

直接的な接触はわりと限られていたが、特に英語の口語の影響が感じられる外来語にその影響が現れている。例えば「プリン」(pudding)、「メリケン」(American)、「ハンカチ」(handkerchief)はその例である。これらの単語のカタカナ表記は英語の発音に基づいている。しかし多くの英語からの外来語は「グローブ」(glove)などのように英語の発音より英語の表記を基に作られた単語である。

当時の外来語の状況を把握するためには、国語辞書・外来語辞書を調べるのが便利である。Loveday (1996)は様々な辞書に載っている外来語数を比べ、1886年の辞書における外来語が410語であるのに対し、1912年の辞書における外来語数が1,596語まで増えたと指摘している。外来語のジャンルに関しては、生活(生活用語)と学問に必要な単語が多いと主張している。

Igarashi (2007)などは外来語の取入れパターンとして広く使用されたのは以下の三つであると述べる。

1. 外国語の翻訳 (loan translation)。

これは漢字を使い、外国語の概念を翻訳する方法である。「電話」「心理」のような翻訳語として作られた漢語(新漢語)がこれに属している。

2. 外国語の音を漢字で表記する(漢字に仮名ルビを添える)。漢字の意味ではなく、漢字の音を使用した方法である。

例えば漢字で「倶楽部」と書き、ルビで「クラブ」を添え、そのように発音すべきであると表示するものである。

3. 外国語を直接仮名に音訳し、場合によって括弧内に漢字で意味を表す。

これは現在のカタカナ語に最も近い方法である。例えば外国の Minister はカタカナで「ミニストル」と書き、括弧に「大臣」という意味であると示す。

文明開化と共に輸入された洋語は大量で、以上の方法は盛んであった。

以下に輸入された洋語の文学作品での使用状況を中心に分析する。

3. 文学作品における外来語・外国語の使用

上述したように分析の資料として福沢諭吉、夏目漱石と森鷗外の作品を使用する。取り上げる外来語・外国語の後ろに括弧でページ番号を記入する。

作品の原文では漢字のルビが次のように付けてある。(元々縦書き)
フランス ステッキ アナロジー ソシオロジー
仏蘭西、洋杖、類推、社会学

本稿では以上のような単語のルビを括弧に入れることにする。例えばフランス(仏蘭西)と書く。

3.1 全作品における外国の国名、地名・人名

資料として使用した文学作品の全てに西洋の国名、地名と人名が頻繁に使用されているが、その殆どがカタカナ表記で書かれている。これらには詳しく触れないが、以下に福沢諭吉の作品から数例を取り上げる。西洋の国名、地名、人名の使用はこれらの作品の著者が西洋の地理・歴史・文化に関して多くの知識を持っていた証拠と言えよう。

地名

アメリカ (105)、サンフランシスコ (106)、ワシントン (105)、ハワイ(110)、ロシア (111)、ヨーロッパ (124)、イギリス(125)、ベルリン(125)、パリ(125)、フランス (仏蘭西) (125)、ペートルスボルグ (125)、イタリア (伊太利亜)

フランス、イタリアは漢字でも表記されている。

人名

ターナ (Joseph. M. W. Turner)、ラフハエル(Santi Raffaello)、ゴーリキー(Maksim Gorki)、フランクリン(Benjamin Franklin)、クロパトキン(Aleksei Nikolaevich Kuropatkin)

人名は全てカタカナ表記となっている。注釈には原語の表記での名前と説明が書いている。

3.2 福沢諭吉

以下、諭吉の『福翁自伝』における「初めてアメリカに渡る」、「ヨーロッパ各国に行く」、「再度米国行」という章に絞って分析する。

以上の三つの章には以下の外来語が出現している。

ヒュルプマシーネ (105)、カピテン (105)、弗(ドルラル)(109)、ペートル帝 (111)、ホテル (113)、ドック(113)、シャンパン (114)、コップ (114)、マッチ (114)、ストーヴ (114)、ダンシング (115)、ガルヴァニ (116)、テレグラフ (116)、ガス (便所の内外ガスの光明) (128)、エレキトル (122)、テーブル (123)、洋銀の弗 (ドル) (166)、コンミッション (手数料) (168)

外来語の数はあまり多くないが、基本的にカタカナだけで表記されている。しかし、いくつかの単語には漢字に仮名名が与えられている。例えば漢字の「弗」に「ドル」 と片仮名名を添えている。そして、それが「洋銀」であると説明も付いている。カタカナ語の後ろに日本語訳を付ける例もある。例えば「コンミッション」の後ろに「手数料」と日本語訳が書いてある。

語彙分野としては、多数の外来語が技術的なもの・概念を示す(特に西洋の船旅と料理)。オランダ語起源の言葉が多く、現在では使用されていないものもわりと多い。

ここでは詳しく触れないが、福沢諭吉は日本語の接続詞、接続助詞、間投詞、コソアドなどにもカタカナ表記を使用している。(例：ソレカラ、ソナ、マア、サア)。

3.3 夏目漱石

夏目漱石は福沢諭吉より外来語を数多く使用している。

3.3.1 『坊ちゃん』

『坊ちゃん』においては外来語も、英語そのものも、カタカナ表記の英語も使用されている。以下が『坊ちゃん』に出現している外来語である。

ナイフ（西洋製のナイフ）(5)、ポケット (14)、ズッグ（ズッグの鞆）(15、17)、プラットフォーム (15)、マッチ箱 (16)、フラネル (20)、シャツ、赤シャツ (20)、ウイッチ (23)、ケット (26)、ランプ (38)、ダイヤモンド (38)、パイプ (60、64)、ハンケチ (半巾) (60)、ハイカラ (ハイカラ野郎) (99、101) (ハイカラ頭) (77、103)、ズボン (100)、リボン (103)、バイオリン (103)、ステッキ (104)、ランプ (洋燈) (126)、セピア色

外来語は基本的にカタカナだけで表記されているが、「ハンケチ（半巾）」や「洋燈（ランプ）」のように漢字にカタカナを添えた表記もいくつかある。「マッチ箱」、「セピア色」などのようにカタカナと平仮名・漢字を混ぜた複合語もある。

「ケット」と「ブランケット」、「ハンケチ」と「ハンカチ」と「ハンカチフ」のように同じ単語が複数の形で表記されているのは、英語の口語と書き言葉それぞれから輸入された証拠であろう。

以上の外来語は殆ど現在にも使用されている。

カタカナ表記の英語の例では以下の文章の「ウイッチ」は興味深いケースである。

「。。女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。中学校に居た時ウイッチと云う言葉を習った事があるがこの女房は正にウイッチに似ている。ウイッチだって人の女房だから構わない。（『坊ちゃん、23』）」

ここで使われている「ウイッチ」という単語は英語の”witch”のカタカナ化であり、日本語には定着していない言葉だと判断できる。しかし、使用方法は非常に適切で、夏目漱石は英語の文字通りの意味だけでなく、言葉のイメージ、含意さえも十分に理解していたことが分かる。

また以下の例で見るように、英語の引用も所々に出現している。

「。。山嵐は **might it right** という英語を引いて説論を加えた。（『坊ちゃん 31』）」

「... 英語でぺらぺらと **I am glad to see you** というと、博物はなるほど面白い、英語入だねと感心している。（『坊ちゃん、104』）」

特に英語の表現、挨拶、決まり文句、即ち日本語に訳しにくいものが、英語のまま日本語の文章に挿入されている。

3.3.2 『文鳥・夢十夜』

『文鳥・夢十夜』にはさらに多くの外来語が出現しており、それらは以下のカテゴリー

に分類できる。

あ) 日常生活で使われるもの・道具、身近にあるものなど

硝子 (ガラス) (9)、洋燈 (ランプ) (10,60、69)、ペン、(17,19)、ピアノ・ピヤノ (洋琴)、洋杖 (ステッキ) (51)、暖炉 (ストーブ) (68)、ロッキング・チェア (75)、敲子 (ノッカー) door knocker、ベル (号鈴) (96)、ポンプ (76)、停車場 (大ステーション) (244)、バス、ローン lawn (98)、泥炭 (PEAT) peat (99)、プラットフォーム、ガス (瓦斯) (100)、リボン(絹紐) (106)、マッチ、自動革砥 (オートストロップ) “whetstone” (224) ベゴニア、コップ(洋盃) (238)、ヴァイオリン (107)、端艇 (ボート) (119)、志 (シリング、シルリング) (121)、印気 (インキ) (145)、ダイナマイト、グラム、寢床 (ベッド) (209)、ミリメター、コスモス (264)

い) 飲食類

パン (18)、バナナ (50)、トースト (焼麩) (71)、アルコール、オートミール (194)、ビスケット (194)、モルヒネ (170)、氷クリーム (アイスクリーム) (162)

う) 服装

半巾 (ハンケチ) (43)、キルト、フロック (54)、パナマの帽、マントルピース、ドレスィング・ガウン (75)、スカート (81)、ズボン (洋袴) (121)、フラネル (122)、サンダル

え) 建物・空間

サローン、ギャラリー (82)、スチュージオ(145)

お) 抽象的な概念

ゴシック式 (99)、チャンピオン (119)、アクセント (71)、センチメント (127)、類推 (アナロジー) (135)、弁証法 (ダイアレクチック) (135)、理知主義 (インテレクチュアリズム) (135)、力学的 (ダイナミック) (146)、(146)、宇宙創造論 (コスモジェニー) (147)、ジスイリュージョン (150)、ヒューモア (161)、アンニュイ (196)、スピリチズム (172)、アイロニー (212)、ウイット (161) “wit”、二象面 (フェーゼス) (168)、ブラインド (98)

か) 物事の抽象的な特質

コンフォタブルな (76)、スタチック (静) (175)、懷疑 (スケプチック) (217)

以上のカテゴリーから言えるのは、抽象的・科学的な概念が多く使用され始めたことであろう。文学・哲学・社会学などの西洋の基本的な概念である。

文法範疇としては普通名詞に加えて、「コンフォタブルな」のような形容動詞も輸入され、使用されていることが分かる。

外来語が使われている例文を見る限り、特に外国人・外国のものを語るために使用されると分かる。

「先生の顔にセンチメントの出たのはこの時だけである。(127)」

「裏通りを隔てて向かう側に高いゴシック式の教会の塔がある。(99)」

外来語の表記には二つのタイプが広く見られる。

1. カタカナだけのもの：バナナ、ビスケットなど
2. 漢字で意味を表し、片仮名名ルビを添えるもの： 弁証法 (ダイアレクチック)、社会学 (ソシオロジー) など。

二つの方法ともよく使われている。

漢字で意味が表されているものの中で、「洋」という漢字の使用は大変興味深い。新しく生活で使い始めた外国のものの中に「洋」という漢字が付けられるものが多い。以下の例から分かるように、日本で相当するものの漢字に「洋」という漢字をつけて外国の物を示している。

ズボン (洋袴)、コップ (洋盃) (238)、洋燈 (ランプ) (10、60、69)、ピアノ・ピヤノ (洋琴)、洋杖 (ステッキ) (51)

例えば西洋のピアノは西洋における日本の琴に相当するものと考えられ、「洋琴」という漢字で説明される。

使用した『文鳥・夢十夜』は昭和版である。本文の最後にいくつかの外来語が注釈で説明されている。こうした説明が必要であることがもうそれらの外来語は昭和時代には日常的に使用されなくなったという意味であろう。

単語	注釈
メルトン (247)	フロックコート (礼服) などの生地 に用いる厚手の毛織物
ドレッシング・ガウン (247)	dressing gown (英) 化粧着、部屋着
ギャラリー (247)	ギャラリー gallery (英)
ローン (248)	lawn (英) 芝生
キルト (248)	(英) スコットランドの北西部、いわゆる高地地方の男子や軍人が正装とする短いスカート
スピリチズム (253)	Spiritism (英) 死者の霊が霊媒を介して生者と交霊すると説く心霊論

英語そのものもある程度使用されている。『坊ちゃん』の場合と同じように表現、洋書のタイトルなどが英語のままで使用されている。例えば詩人の Allan Poe の詩を引用してい

るところに *No more, never more* (ノーモアー ネヴァーモアー)は英語で書いてあり、また書物の題名は *Time and free Will*(時と自由意志)(137)」と書かれている。

文章の中にも以下のように英語が使用される。

「... my brother (マイブラザー) と主婦がその男を自分に紹介した。(72)」

3.4 森鷗外の『雁』

『雁』には外来語が少ないのに対し、外国語(英語、フランス語、ドイツ語)が目立って多い。

外来語は次の言葉が出現している。

石鹸箱(シャボン)(109)、ランプ(129) パナマ帽、ハンカチーフ、ブリキ、カナリア(171)、マッチ、メリンス(176)、シャボン(183)、マルク、ドクトル、サンプル(159)

英語起源のものが少なく、オランダ語起源のほうが多いように感じる。

それに対し、外国語の単語が目立つほど多く使用されている。表記は原語のまま、片仮名のルビで読み方が表されている。カタカナの使用から判断すると、発音を基に考えられたことが分かる。

フランス語

sentimental な(サンチマンタル)(111)、fête(フェエト)(119)、solennel な(ソランネル)(120)、tête-à-tête(テタテト)(122)、tyran(チラン)(125)、culture(キュルチュウル)(137)、palliatif(パリアチーフ)(151)、parallaxe(パララックセ)(203)、époque(エポック)(166)、oeillères(オヨイエエル)(193)、hallucination(アリユシナション)(195)、bitiume(ビチュウム)(199)、professor(プロフェッソル)(201)

フランス語の単語が最も多く、名詞も形容詞も出現する。

英語

chaos(カオス)(134)、mimicry(ミミクリイ)(137)

ドイツ語

Silentium!(シレンチウム)(205)、Unbefangen(ウンベファンゲン)(207)

以上の言葉が入っている例文を見ると外国の雰囲気、感じ方を表そうとしていると分かる。

「それがお玉に目見えをさせると云うことになって、ふいと晴がましい、solennel (ソランネル) な心持になって。。(120)」

「平生妻子に対しては、tyran (チラン) のような振舞をしているので。。(125)」

森鷗外はフランス語、英語、ドイツ語をマスターしていたに違いない。

4. 日本人に見られる外来語・外国語に対する態度

このように導入された新語に対しての当時の日本人の態度を説明するために四つの要素に分けて述べる。

1. アルファベットの使用
2. 英語の使用
3. 外来語とカタカナの使用
4. 翻訳の方法

4.1 アルファベット

外国語との最初の接触で日本人がまず驚いたのはそれらの表記、即ちアルファベットの様子であった。福沢諭吉の作品ではアルファベットのことを横文字という。やはり一番目立ったのは縦ではなく、横に書くことであった。以下の引用で分かるように、福沢自身も含めて地方の人たちは横文字と出会った時に訳が分からないものとして受け取った。

「その時分には中津の藩地に横文字を読む者がないのみならず、横文字を見たものもなかった。(27)」

同じ福沢は時間が経つにつれ、日本で横文字は普通に使われるようになったと述べる。「今では日本国中至る所に、徳利の貼紙を見ても横文字はいくらもある。目に慣れて珍しくもないが、初めての時はなかなか六かしい。(28)」

4.2 英語

福沢諭吉の作品では英語への態度は、一般の人の態度と福沢自身のような知識人の態度に分かれている。

以下から読み取れるように一般の人は西洋のもの全体が嫌いであった。「藩中一般の説はしばらく差措き、近い親類の者までも西洋は大嫌いで、何事も話すことが出来ない。(47)」

逆に、知識人は英語の国際社会で果たす役割をよく意識していた。「なんでもあれは英語に違いない、今我国は条約を結んで開けかかっている、さすればこの後英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければとても何にも通ずることができない、この後は英語を読むより外にし方がないと。。。(100)」

しかしオランダ語に慣れていた知識人でも、最初英語は勉強しにくいと考えた。その後、徐々にオランダ語と英語の共通点などを発見するようになった。

「実際を見れば蘭といい英というも等しく横文にして、その文法も略相同じければ、蘭書読む力はおのずから英書にも適用して、決して無益でない。(104)」

また日本人は英語を使っているとき様々な発音の間違いで困っていたこともユーモラスに語られる。

「まずこんな塩梅式だから、吾々一行の失策物笑いは数限りもない。シガーとシュガーを間違えて煙草を買いにやって砂糖を持って来るもあり、医者是人参と思って買って来て生

姜の粉であったこともある。(127)」

日本人には英語のシガー (cigar) とシュガー(sugar)が同じように聞こえ、同じように発音してしまったということである。

4.3 外来語とカタカナ

夏目漱石の作品では距離を置いた客観的・批判的な外国語に対しての意見が述べられている。

『坊ちゃん』の有名な登場人物マドンナの名前についてこんな対話がある。

「— まだ御存知ないかなもし。

— うん、マドンナですか。僕は芸者の名かと思った。

— いいえ、あなた。マドンナというと唐人の言葉で、別嬪さんの事じゃろうがなもし。

(70)」

夏目漱石は本当の知識人と「赤シャツ」のような表面的な知識人の差を外来語の使い方によっても表している。

「一番槍は御手柄だが、ゴルキじゃ、と野だがまた生意気を云うと、ゴルキというと露西亜の文学者みた様な名だねと赤シャツが洒落た。そうですね、まるで露西亜の文学者ですね、と野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亜の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だろう。一体この赤シャツは悪い癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があったものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。云うならフランクリンの自伝だかプッシング、ツー、ゼ、フロントとか、おれでも知ってる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学と云う真赤な雑誌を学校へ持ってきて有難そうに読んでいる。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。(46)」

「坊ちゃん」は「赤シャツ」が普段使っている片仮名を非常に嫌っている。

「赤シャツ」のような人間は英語がかっこいいとも思っている。

「よう聞いて、いなはれや一花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはバイオリン、半可の英語でぺらぺらと、I am glad to see you と唄うと、博物は成程面白い、英語入りだねと関心している。(103)」

しかし、「坊ちゃん」のような本当の知識人がもう「ハイカラ」のことを批判的に見始めていたことが分かる。

「が、聞くところによれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代僕直の気風を帯びているそうである。心にもないお世辞を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き温良篤厚の士は必ずその地方一般の受けられるに相違ない。(99)」

4.4 翻訳・外国語の取入れ

福沢諭吉は「競争」という言葉の誕生について述べている。以下の文章では翻訳、新語の作成への政治の影響があったとよく感じられる。

「重要な職にいる人に、その経済書のことを語ると、どうか目録だけでもいいから是非見たいと所望するから、早速翻訳する中に、コンペチジョンという原語に出遭い、いろいろ考えた末、競争という訳字を造り出してこれに当てはめ、前後二十条ばかりの目録を翻訳してこれを見せたところが、その人がこれを見て頻りに感心していたようだが「イヤここに争いという字がある、ドウもこれが穏やかでない、どんなことであるか」

「なるほどそう言えば、分からないことはないが、何分ドウモ争いという文字が穏やかならぬ。これではドウモ御老中方へご覧に入れることが出来ない」

(184、5)』

また森鷗外の「翻訳に就いて」というエッセーでは外国の文学作品の翻訳に関して意味深く論じられている。特に「飴玉とマクロン」という部分は面白い。

「ノラの食べるお菓子を予はマクロンと書いた。それを飴玉と書けと教えて貰った。これなんぞにはあつとばかりに驚かざることを得ない。(。。。) 西洋の女がマクロンを食ふ場合と、日本の子供が飴玉を食ふ場合との相違はどの位違うか、少し考えてみるが好い。誰やらの小説に、パリの女学生二人がカルチエエ・ラテンの下宿あたりマクロンを頬張りながら失恋の話をしている所がある。あそこなんぞを飴玉にしたら、さぞ面白からう。日本固有の物で、ふさはしいものにして書けと云ふ教であるが、予なんぞは努めて日本固有の物を避けて、特殊の感じを出そうとしている。それもふさはしい物ならまだしもである。日本固有の物にして、しかもふさはしくないと来てはたまらない。」

「飴玉」と「マクロン」が日本とフランスの社会においてどのようなイメージを持ち、どんな立場のシンボルであったか考えなければならないという森鷗外の主張は非常に現代的であると思われる。

以下の飴玉とマクロンの写真で分かるように共通点は色ぐらいであろう。



飴玉



マクロン

5. 結論

明治時代の作品における外来語の使用と外国語・外来語の取り扱いには日本の外国に対しての現在まで残っている典型的な外国文化へのアプローチが明確に現れているといえよう。外国語を積極的に使用しようとするより、むしろ日本語的に言葉を変え使用している。

また表記にはアルファベット・漢字・平仮名などを抵抗なく、混ぜて使用する明治時代の現象は、現在の電車における広告にも、ファッション雑誌にもいくらかでも発見できる。さらに表記だけでなく、意味でも言葉遊びをしているようなケースは日本語の根本的な性質を映しているといえよう。

参考文献

- Caroll T. 2001. *Language Planning and Language Change in Japan*, Richard Curzon Press
- Fukuzawa Yukichi. 2007. *Autobiography* (translated by Eiichi Kiyooka), Columbia University Press, New York
- Hirakawa Suehiro. 2005. *Japan's Love-Hate Relationship with the West*, Global Oriental LTD
- Hosokawa Naoko. *The Language of Civilization: Identity and Desire in the Meiji Era Language Reform Debates*, www.orinst.ox.ac.uk/research/jap-ling/files/hosokawa.easgsupaper.pdf, accessed at 5.09.2010
- Igarashi Yuko. 2007. *The Changing Role of Katakana in the Japanese Writing System: Processing and Pedagogical Dimensions for Native Speakers and Foreign Learners*, Ph.D Thesis, University of Victoria
- Loveday Leo J. 1996. *Language Contact in Japan. A Socio-Linguistic History*, Clarendon Press, Oxford
- Miyamoto Masaaki. 2009. "A Research Proposal: Modernization and Development of the Indigenous Language in Post-Colonial Africa and Asia. Local Languages, Linguae Francae and the Hegemony of English in Multilingual Societies. Comparative Case Studies: Kiswahili, isi -Xhosa, Bahasa Indonesia / Malay and Hindi with Special Reference to Modern Japanese Language". 貿易風—中部大学国際関係学部論集— 第4号, 99-113.
- Mori Ōgai. *On Translation*, <http://neojaponisme.com/2010/01/19/haters|-gonna-hate-mori-ogai-on-translation/> accessed at 14.07.2010
- Otake Pine Margret. 2008. "Gairaigo – Remodeling Language to Fit Japanese", 東京成徳大学人文学部研究紀要 第15号
- Sugito Seiju. 1989. "Lexical aspects of the modernization of Japanese", in Florian Coulmas (ed), *Language Adaptation*, Cambridge University Press
- Sōseki Natsume. 1968. *Botchan* (translated by Umeji Sasaki), Charles and Tuttle Company
- Takada Makoto. 1989. "The development of Japanese Society and the modernization of Japanese during Meiji Restoration, in Florian Coulmas (ed), *Language Adaptation*, Cambridge University Press
- 福沢諭吉 『福翁自伝』、岩波書店 2007
- 夏目漱石 『坊ちゃん』 新潮文庫 平成3
- 夏目漱石 『文鳥・夢十夜』 新潮文庫 1976
- 日本近代文学大系 1 1 森鷗外集 昭和49
- 森林太郎 『翻訳に就』 . http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/49251_36953.html accessed at 14/07.2010